

かささぎ通信 第142号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2024年 12月 13日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2024年11月の「森三郎の作品を読む会」では、

「ひぐらしの村」(『雪ごんごんお寺の柿の木』1943年12月)

「杉でつぼう」(『赤い鳥』1933年10月号)を読みました。

「ひぐらしの村」は片意地な人ばかりが住んでいた村の話です。

ある日、黒い風呂敷包みを背負った見慣れない男が村へ入ってきました。咽喉が乾いた男は一軒の家の前で水を一杯所望しますが「風来坊にやる水なんかあるものか。」と追い立てられ、次の家で煙草の火を借りようとしても同じ様にはねつけられます。どの家でも同じように断られた末に、村一番の長者の邸に行つて一夜の宿を頼みます。しかしここでも「軒を貸すのもまっぴらだ」と断られます。この後、男は村はずれの小高い丘に登つて、背負っていた包から黒い箱を取り出し大きな石の上に据えると、腰にさしていた笛を吹き始めます。

笛の音色は「生水一杯くれなんだ／煙草の火さえ貸さなんだ／夜ウサの泊りもさせなんだ」と歌っているようでした。笛の音を聞くと、村中の子どもたちが集まつて来ました。男は子どもたちに「オランダの大からくりを見せてやろう」と言つて、黒い箱をのぞかせます。からくりの中で女の人が手を伸ばして子どもたちを一人一人中へ引き入れます。子どもたちが全員箱の中に入つてしまうと、男は箱を包んで軽々と背負い、笛を吹きながら村を去つていきました。

子どもたちがいないことに気付いた村人たちは、高い松の木に登つて遠くを眺め、「おおい、おおい」と呼び続け、ひぐらしになつてしましました。「おおい、おおいーカナカナカナ」と鳴きました。片意地な村は「ひぐらしの村」になつたという話です。

皆で読み合わせながら、それぞれどこかで読んだことのある話だと思つていました。「ハーメルンの笛吹き男」の話、森三郎の童話「うんすんガルタ」の中の不思議な女の人(トランプの女王)の場面などが浮かんできました。刈谷の昔話に似ていると言う声もありました。

「ひぐらしの村」の場合と同じように、旅で疲れた身なりのきたない

坊さんをどこの家でも泊めてくれないので、蚊に悩まされながら外で寝た坊さんが「刈谷蚊よおれ、晩豆(おくまめ)なるな」と言つて立ち去つて行きました。その後は刈谷には蚊が多く、晩豆の実入りが悪くなつたという、弘法大師にまつわる話です(『昔話 天狗火』参照)。

この「ひぐらしの村」の場合は旅の男はどういう人だったのでしょか。作者の三郎さんはわずかな助けを求めている人に何もしない行為を「片意地」と言っています。その代償はあまりにも大きすぎるものでしたが、現在の世界情勢を見回すと、自分の中にそんな心は無いだろうかと、ふつと思わされる作品でした。「ひぐらし」は「秋蟬」

(『赤い鳥』昭和9年2月号)にも出てくる大事なキーワードです。『赤い鳥』の「杉でつぼう(杉でつぼう)」は杉でつぼう・木登りなど、三郎さんの小学生の頃(大正時代)の子どもの遊びが題材になっています(「かささぎ通信」第36号参照)。

昼休みに六、七人の子どもたちが学校の裏山で杉でつぼうを作つて遊んでいた時、主人公は杉の木の上の方に大きな鳥の巣があるのを見つけます。一人が木に登つて様子を見に行きますが、夢中になつているうちに午後の唱歌の授業の歌声が聞こえてきます。みんなで急いで戻り、教室に入りかねていると「坊や先に入れよ」と主人公は押し出されます。主人公は一人っ子で尋常四年になつた今も家で「坊や」と呼ばれていたのです。先生に注意を受けて帰る時にもみんなから「坊やが鳥の巣なんか見つけるからいけないのだ」と言われ、「坊や」の呼び名でからかわれます。両親に「坊やなんて呼ばないで」と言おうと決心して帰宅しますが、結局言うことができませんでした。

主人公の学校生活と家庭での様子の二つに焦点が当たつていて、今の子どものたちの感想を聞きたくなる作品でした。

〈次回予定〉2025年1月10日(金)午後一時半~三時半

「二人静」(『雪ごんごんお寺の柿の木』1943.12)

「ほたる」(『赤い鳥』1933.11)